

## 「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」

基礎・基本の定着～個と集団をつなぎ、学び合う生徒の育成を意図して～

### I 研究の内容

本校は関東地区の中心地域である塩山の中心に位置し、商業地域や郊外に農業地域が広がる甲州の鎌倉といわれる歴史と文化に満ちた地域である。子どもたちの教育環境も地域ごとに異なり、父母の教育への考え方も多種多様であるが、学校に対する期待は大きいものがある。平成18年度は県の指定により「心に元気をはぐくむ道徳教育推進事業」推進校として道徳教育の研究に取り組んだ。より良いものを求める心、より価値あるものを求めようとする心もまた教育活動全般にわたる基盤となるものである。

このような経緯に沿いながら、本校の大きな課題である「個々の生徒の学力向上」の研究を数年来進めてきており、その成果も確実に上がってきている。その上に立ち、「個」の伸長を意図した上で「集団」のレベルアップを図っていくことに重点を置き、昨年度の研究が進められてきた。「クラスにいると楽しい」「自分はクラスメートから認められている」という意識は、何より学習に対する前向きな気持ちにつながる。また、学級や学年など、共に学ぶ仲間との関係を大切にし、学び合い、伸びあうことができる「学びの共同体」を大切にしたい授業や諸活動の充実が、今以上に大切であると考えている。

学校は学ぶところであるという全員の共通意識のもと、学習習慣や生活習慣の確立や学びに向かう上での基盤を身につけさせること。「時間を守る」「あいさつをする」「人の話をしっかり聞く」「家庭学習にしっかり取り組む」などは集団活動を展開する前提である。そういった基盤に対して、教職員の意識の一致した指導がなされており、今年度もその継続とさらなる工夫を図っていきたい。こうした取り組みとして、昨年度からの「集団力」をさらに高める方策を今年度の研究の方向性として提示したい。そして生徒一人ひとりが「自分が好き、仲間が好き、塩中が好き」になるための研究を今年度は意図し、計画していききたい。

1. 学びの主体となる生徒の「質的」向上
2. 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善
3. 意欲的に学ぶ集団づくり

以上の視点に基づき、本主題を設定し研究を進めたいと考える。

### II 研究の具体的内容と方法

- 1 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって
  - (1) 学力向上の取り組み(家庭学習の習慣化と「ステップアップノート」の活用)
  - (2) 道徳教育の充実による生徒の情操の育成
  - (3) 国語力向上の取り組みの継続
- 2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善
  - (1) CRT・NRT検査の活用による生徒の実態把握と指導方法の改善
  - (2) 実技教科における指導目標の明確化
  - (3) 評価の改善
- 3 意欲的に学ぶ集団づくり

- (1) 学びの場としての基本となる授業規律のいっそうの確立
- (2) 楽しい学校生活を送るためのアンケート(=Q-U)の実施と分析・活用
- (3) 話し合い活動の活性化 ～話し合いのルール(塩中方式)の確立へ～
- (4) ソーシャルスキル, グループエンカウンターを利用した集団づくり

#### 4 研究授業の実施

研究の検証の場として授業研を4回実施した。

- ・ 1学期：奥田真由美教諭(3年1組 英語)
- ・ 2学期：大澤 祐子教諭(1年1.2.3組 保健体育)  
平井 成二教諭(1年3組 学活)
- ・ 3学期：若月 恵美教諭(2年2組 道徳)

### III 成果と課題

集団力の向上をめざし、「話し合い活動の活性化」を生徒会活動とリンクして行ってきましたが、「研究と生徒会が連携できて、生徒のためになる研究になった」との先生方からのコメントがありました。これからも生徒のために定着させていく意義はおおいにあると考えます。「学力向上への取り組み」の中から「ステップアップノート・テスト・タイム」といった継続した取り組みは、基礎基本の定着につながってきていると考えられますが、「固定化しつつある不合格者の救済策」といった課題については、改善していく方策を考えていく必要があります。「意欲的に学ぶ集団づくり」も今年度の大きな柱であり、目標でした。「授業規律のいっそうの確立」は「今年度さらに向上を遂げた。止まってしまうことは簡単、続けることの素晴らしさ」という先生方の意見からもわかるように、だいふ定着し、成果がみられるところです。1学期の奥田真由美先生による3年英語、2学期の大澤祐子先生による1年保健体育、平井成二先生による1年学活、3学期の若月恵美先生による2年道徳の各研究授業。今年度、校内研において多大な労苦をはらいながら、授業を提供してくれた4人の先生方には本当に頭が下がる思いです。塩山中学校の校内研の財産となりました。成果としてあげるならば、これだけ多くのことに先生方が取り組み、ともに学習を進めることができたことです。その結果、生徒についての課題、教師側の課題などがより明確になり、日々の指導に活かすことができたように思います。

一方で今年度も「教科部会の時間の確保」や「評価・シラバスについて」は先生方のご指摘の通り、研究を深めることができなかつたことは課題であります。また集団としての向上の陰で、個を見てみると「ハイ」という返事が小さい生徒やあいさつが進んでできない生徒も見られるなど、教師がどこまで共通して意識し、指導できるかが大切であると思います。

来年度へ向けての要望や方向性についても、先生方から、「今年度と同じ方向性」、「継続」といった意見を多くいただきました。特別な研究ではなく、今の生徒の実情に合うだけでなく、生徒にすぐに還元できる研究こそが大切だと感じます。来年度も教師全員で、本校ならびに生徒達のより良き成長につながる研究をしていきたいと考えます。

(研究主任 丹澤一浩)